

65 歳からの挑戦・中山道を歩く

川本正之

現代社会では、歩くということは疎んじられているような気がする。勿論健康のために早朝から歩いている人はたくさん見かける。でも若い人はほとんど見かけず定年退職のおじさん、中高年のご夫人が多い。車社会の中、果たしてどれだけの人が歩くことに、興味をもっているであろうか。私は歩く楽しさを満喫しているのは健康だけの為だけではない。知らない街を歩き、あるいは旧街道を歩けば昔の旅人の気持ちを汲み取ることが出来るからである。

石川文洋著「日本縦断徒歩の旅」に刺激を受けて、猛暑の2004年7月8日に加納宿(岐阜)から西に向かって歩き始めた。以来3回で草津宿に、続いて岐阜からは東へ、さらに仕事で上京の機会を捉え、日本橋からは西へと向かった。途中、孫と一緒に妻籠・馬込宿も歩いた。中山道は東海道とともに、江戸と京都を結ぶ江戸時代の大幹線道路である。こどもの頃わが家にあった絵本の中に「皇女和宮」があった。また歴史の中、関が原合戦に間に合わなかった二代目将軍徳川秀忠が通った道と記憶にある。姫街道とも言われたようだが、東海道には大きな河川があり(天竜川・大井川・富士川等々)川止めに合うと日数が読めなかった。それに比べ中山道には峻険な峠(碓氷・和田・鳥居)はあるものの、大河はなく日数が読め、特に女性には人気があったようである。ただ季節によっては温暖な太平洋側に行く東海道に比べ、中央山岳地帯を進む中山道はそれだけ難所も多く冬は雪に見舞われ苛酷な道であったようだ。

中山道は日本橋から武蔵を抜け、上野(こうずけ)、信濃、木曾、美濃、近江を経て京都三条大橋まで、百三十五里三十二丁(約534キロ)六十九宿で、東海道よりも40キロ以上長い道程であった。今度の旅では道中、多くの人から親切にいただき、人情の機微というものに触れた。奈良井宿の「民宿津ち川」の女将さん、和田宿の(旅館本亭)ご夫婦、長久保のシルバーセンターの女性事務員や、彼女が連れて行ってくれた十割そば屋「とく田」で出会った桑名のご夫妻、軽井沢の「らーめん軽菜」のご夫妻にもお世話になった。また道端で会った名も知らぬ人たちにも親切に道を教えてもらった。メモ用紙に地図まで描いてくれたが、私なら出来るかどうか反省させられた。このように人の善意をいただいた旅であった。

醒井宿の地蔵川に群生する梅花藻が水流にゆれているさまは見事なもので、3ヵ月後、家内を車に乗せて再訪した。和田峠から見た信州の山の峰々や塩尻峠からの諏訪湖の眺め、N君と歩いた晩秋の軽井沢の紅葉、塩名田の千曲川の流れ等々見事であった。

日頃私たちは、コンビニエント・ストアをどのように利用しているだろうか。私の場合、一番多く使うのはコピーである。コピー以外はそれほど必要性を感じることはない。しかし旅に出るとコンビニは必要欠くべからずものであった。特に夏から始めたので、コンビニにはクーラーが入っており休憩にはもってこいの場所である。さらに給水や、アイスキャンデーを買って一息入れる。さらには、トイレを借りるのも重要な利用法である。人目に付かないときは良いが、街中は困るのでコンビには救いの神となる。

中山道を歩いてみて、その道路事情は旅人を意識してくれている自治体とそうでない自治体と明確に違いがあるのは誠に残念なことである。大型トラックの疾走する和田峠への上り道、

歩道もない国道 142 号などの改善は旧中山道を愛する一人として、田中康夫長野県知事に手紙でお願いした。1 週間ほど後に田中知事から「・・・担当局長に申し伝えた」旨の返事をいただいた。

先日の新聞では、長野県田中康夫知事の記事があった。意味不明のダム建設反対論者、馬籠宿の住民が希望する岐阜県・中津川市への越県合併に異議を挟むなど問題だとあった。

中山道の馬籠は島崎藤村の生まれたところである。藤村の父島崎正樹は、馬籠宿の本陣・庄屋・問屋の三役を兼ね「夜明け前」の主人公青山半蔵のモデルとなった人物である。島崎正樹や小説の青山半蔵は、役目柄、木曾福島(長野県)の代官所に行くことが多かったようだが、気持ちは開けた西方の美濃(岐阜県)とりわけ近くの落合宿、中津川宿の方に親近を抱いていた。

夜明け前の中で半蔵は「あの山の向こうが中津川だよ。美濃(岐阜)は好い国だねえ」と鶴松に語りかけている。尾張・美濃の先進性への憧ればかりであったのだろう。

馬籠は廃藩置県以前、美濃(岐阜)に属したが、昭和 32(1957)年に時の総理大臣の岸信介の裁定で馬籠は長野県の山口村に編入されてしまった。今年2月山口村(人口約2000人)は村民意向調査の結果、賛成多数で、長野県から岐阜県・中津川市への越県合併を決断し、来年2月13日合併する日程で中津川市と調印を済ませた。ところが突然、長野県の田中知事は12月県議会で越県合併に待ったをかけた。“県民の目線で物事を考える”をモットーとしていた知事がなぜ突然待ったをかけたのか理解に苦しむ。その後、江戸時代からの悲願は叶い、めでたく合併は決まり岐阜県山口村馬籠となった。

今回の旅は、先人たちの足跡をしのび、街道の面影を発見できたよい旅であった。

編集子:名古屋に在住の川本 OB は 68 歳と若い。以前から、フルマラソン、登山、旧街道歩き、と元気いっぱい。その記録を“小さな挑戦”という本を私費出版された。ボランティアでは、ネパールの植林活動に参加されている。走る・歩く・登る、書く、と羨ましい。今号の随想は、2004年7月8日から12月3日までの間(歩いた日数18日)中山道534kmを歩き繋いだ紀行文のあとがきである。全体は写真入で60ページもの大作である。川本さんは江戸を中心とした五街道のうち四街道を歩き最後の奥州街道を松川まで歩いている。奥州街道はどこまで?と尋ねたら、津軽の三厩かな?と言う。歩き旅では健康は勿論、歴史と自分の新しい発見がある。皆さんもどこか歩いてみませんか。